

## タイ ゴールデントライアングルに行く

すが 須賀 つとむ 努

コラムニスト・アジアンウオッチャー

中国の旧正月中、タイの北部、ラオス国境付近、いわゆるゴールデントライアングルへ偶然行った。メコン川の向こう側はラオス、そして中洲はミャンマーという実に興味深い光景を目の前で見ると、日本という島国とは全く異なる風景に驚かざるを得ない。普通の日本人はこの辺の地理には疎いのだが、実はタイと中国は直接国境を接していない。だからラオスとミャンマーの重要度が高いことを再認識する。

### 中国から車で来る観光客

メコン川沿いの道路を車で走っていると物凄い数の中国車、特に『雲（雲南）』ナンバーの乗用車が疾走していく。ラオスとタイの間に友好橋が架かり、いわゆるアジアンハイウエーに乗り、中国本土からラオス経由で乗りつけてきているのだ。雲南省の省都 昆明からここまで約900km、ノンストップの高速道路を使えば、わずか6時間で来ることができるという。ついにそんな時代が来たのか、と雄大なメコン川を見ながら感慨に浸る。

中には遠く西安から3日かかりで、車の旅をしてきた中国人ツアーもあった。中国国内の車の旅も高速道路が快適だったが、ラオスの道路もスムーズでよかったと言われ実に驚いた。確かラオスは中国からの支援で道路を作ることに反対していたのが、いつの間にか道路が作られていた。アジアンハイウエー、このプロジェクトは中国を利するに十分である。今回は旧正月だったため、トラックやダンプ、トレーラーを見かけることは稀であったが、既にタイ側のチェンセーンとチェンコーンの間には港も整

備され、地元民によれば、陸運、海運共に、中国から大量の物資が運ばれてきているという。

日本人のイ

メージでは、タイはそれなりに発展している国、と映っているが、実際はかなり遅れている。ゴールデントライアングルから首都バンコクまでも距離は900km程度で昆明とほぼ同じではあるが、車で行こうとすれば最低12時間はかかるという。むしろ、国内の方が整備は進んでいないのが実情である。

### 実に遅いタイの鉄道

それは鉄道も同じ。タイの鉄道の歴史は100年を超えるが、その運行は恐ろしく遅い。バンコクの中央駅、フワランポーン駅は今も昔の面影を十分に残しており、その緩い雰囲気は如何にも南国タイを感じさせる。そしてそこを出発した列車にはほぼ例外なく遅延が発生し、筆者が以前乗車したラオス国境ノンカイ行きの寝台列車は12時間の予定が16時間もかかって到着した。これが日常茶飯事だというのだから驚きだ。

遅延の理由は『複線化などが進まずシステム的に無理があること、そして従業員に時間厳守の意識がないこと』だと、あるタイ人に言われ、更に驚いたのを覚えている。もしこれが中国人だったら、自らの利



写真1 西安から3日かけてタイまで車で来た中国人



#### 【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。  
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。  
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子



益に繋がるなら必要な処置を直ぐに取るだろう。しかしタイでは一向に進まないらしい。

『タイの発展が緩やかな理由はいくつかの勢力が拮抗し、ある勢力が出てくると他の勢力がそれを叩く。お互いが意識せずに歯止めをかけているから』とタイに長く住むある日本人は解説する。日本政府は積極的にタイに新幹線を売り込んでいるが、最近では格安航空会社の台頭もあり、長距離バスも苦戦している状況だ。『新幹線よりスピードの速い貨物輸送が必要』との声も聞かれるのも当然のことかと思う。

#### 国民党残党の村がある

実は筆者は趣味でアジアの茶畑を訪ね歩いている。その中に、タイの山中、メーサローンという標高1200mの場所がある。そこには広大な茶畑があり、タイで一番の茶産地と言われている。2006年に初めてそこを訪れた際は、『日本のパスポートを持ち、中国語を話す』ということで、地元の人に怪しいと警戒された。

この地に中国の国共内戦で敗れた国民党の軍とその家族が入り込んだのは1960年代。当初は雲南からビルマへ逃げ込んだが、ビルマにも革命が起こり、タイ山中への移動を余儀なくされた。70年代にタイに帰順し、土着化を進め、観光業と茶業を柱に生活してきた。実はこの辺りもゴールドトライアングルの一角、けし栽培が行われていたとも言われ、けしの代替作物として茶樹が植えられたとみられる。地元民は決して口にはしないが、茶畑の歴史は20-30年に過ぎないことからそれが分かる。最近はこの街に中国系の投資が入り始めたとの話もある。時代

は変わるものだ。

因みにタイ北部には国民党系の主な村が13あると言われているが、今回チェ

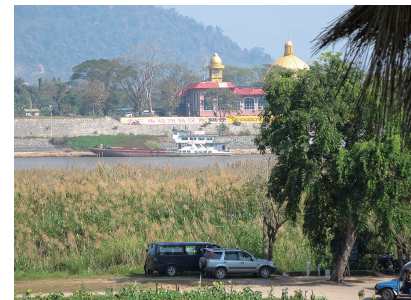


写真2 タイ側から見る中州ミャンマー、対岸ラオスのカジノ

ンコーンの山中でも村を1つ見かけた。1960年代、この地がどのような場所だったかは想像できないが、かなり困難な状況下、生きるために切り開いたことは間違いない。

#### 国境の街 メーサイ

ミャンマーとタイの国境の街がメーサイである。対岸が直ぐ見える小さな川を渡ればそこはミャンマー側のタチレク。両国が如何に近いかが良く分かる風景だ。メーサイの国境ゲート脇には、アーケードが出来、服やバッグ、食料品から日用品まで何でも売っている。しかもどう見てもまとめ買い用になっており、タイからミャンマーへ物資がハンドキャリーされていくのが良く分かる。

そこには中国街という道もあり、中国製品もタイを経由してミャンマーに入っていく。安価でその割に質の良い中国製品は、今や東南アジアでは欠かせない商品となっている。もしこの流通が止まると、生活に支障をきたすまでに各国に浸透しており、中国の重要戦略物資となっている。これが中国の強みであり、今後中国から人と物が雪崩を打って入ってくる、そんな勢いのようなものを強く感じる旅であった。